

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 18 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2008～2011

課題番号：20242019

研究課題名(和文)出土資料群のデータベース化とそれを用いた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析

研究課題名(英文)A versatile analysis of basic society in ancient China by using database of excavated relics

研究代表者

関尾 史郎 (SEKIO SHIRO)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：70179331

研究分野：中国古代史，史料学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：簡牘・画像碑・壁画墓・鎮墓文・出土資料群

1. 研究計画の概要

(1) 本研究課題は、中国の西南地域である湖南省長沙市出土の各種簡牘群，西北地域である甘粛省・新疆ウイグル自治区出土の磚画・壁画と鎮墓瓶など出土資料群のデータベース化と，それを利用した中国古代史わけても漢魏交替期における基層社会の構造と展開に関して多面的な分析を行うことを目的としている。

(2) 漢魏交替期は中国史上の画期の一つとして早くから注目を浴びてきたが，その反面，当該時期の基層社会の具体的な状況を明らかにできるような一次史料には恵まれていなかった。したがって『三国志』以下の編纂史料から読み取れる政治的な状況や諸制度をもって，当該時期を理解するという研究状況が長らく続いていた。本研究課題で取り上げる出土資料群は，前世紀末によく紹介されるようになったものがほとんどである。

(3) 出土資料に対する関心は近年とみに高まりを見せているが，本研究課題では，これらを個別に取り出して分析するのではなく，「出土資料群」としてその全貌を対象とし，資料的な価値を見定めた上で，個別的分析を行う。またそのために，歴史学にとどまらず，考古学・書道史・簡牘学・図像学・美術史など関連分野の研究者を分担者・連携研究者・協力者として組織している。

2. 研究の進捗状況

(1) 湖南省長沙市出土の各種簡牘群については，内容のみならず，形態・様式や機能についても分析を進めることができた。その結果，大木簡(史民田家荊)や竹簡(賦税納入

簡)などが，券書でありながら，簿籍であり，かつ納税証明書というように，複数の機能を併せ持つことが判明した。また戸品出銭簡という竹簡は上申文書という性格を有することも判明した。そしてこれらの簡牘の作成から廃棄に至るプロセスを検討することにより，当地の基層社会と支配システムの一部を解明することができた。また内容的には，同じ長沙市の東牌楼出土の後漢簡や湖南省郴州市蘇仙橋出土の呉・西晋簡などの記述と共通する点が認められた。具体的な例としては，後漢から呉にかけて，広く湘江流域で，「丘」に代表される支配システムが行われていた可能性が明らかになった。

(2) 甘粛省出土の磚画・壁画に関しては，実見可能なものはほとんど実見することができた。また鎮墓瓶についても，未公開のものも含めて実見の機会を得た。その結果わかったことは，磚画・壁画についても，鎮墓瓶についても，地域的な分布に際だった特徴があることが解明された。磚画については，河西地域西部(高台・酒泉・嘉峪関・瓜州・敦煌)に集中しているものの，敦煌とそれ以外では，墓内配置やモチーフに顕著な相違があること，敦煌タイプの磚画が，新疆ウイグル自治区のクチャで確認できること，それ以外でも高台と酒泉・嘉峪関には微妙な違いがあること，壁画は，河西西部(民楽・高台・酒泉)のほか，新疆のトゥルファンで見られることなどである。鎮墓瓶については，河西とその周辺地域に魏晋・五胡時代，広く普及していたが，敦煌では3世紀末から5世紀初めにかけて爆発的に普及したこと，また敦煌タイプの鎮墓瓶が新疆のニヤで確認できること，などである。

3. 現在までの達成度
やや遅れている。

(理由)

湖南省長沙市出土の各種簡牘群について、現在刊行中の大型図録本『長沙走馬楼三国呉簡』に収載されている写真に依拠しながら、データベースを作成すると同時に、現地で実物を閲覧する計画であった。しかしながら、この大型図録本の刊行が中断されているので、データベースの作成も現地での閲覧も停滞を余儀なくされている。

また甘粛省出土の磚画・壁画については、データベース作成の基礎資料とも言うべき大型図録本『甘粛出土魏晋唐墓壁画』が2009年に刊行されたものの、写真が不鮮明であるばかりか、各磚画に関する基礎データが混乱しており、基礎資料として致命的な欠陥があることがわかった。そのため、データベース作業が遅延せざるをえない状況にある。新疆ウイグル自治区クチャ県で発見された画像磚墓については、現在博物館の建設工事中で、閲覧が不可能な状態にあり、これについては、科研期間中での閲覧調査を断念することにした。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 最終年度にあたる2011年度には、海外協力研究者を招聘して、国際ワークショップを予定しており、現在日程を打診中である。

(2) 遅延しているデータベース作成作業については、まず期間内に、磚画・壁画、鎮墓瓶、甘粛省高台県出土簡帛の3種について完成を急ぐ。

(3) 代表者・分担者・連携研究者・協力者の研究成果をまとめた冊子体の論集を別途編集して刊行の予定である。なお刊行は、科研期間満了後を予定している。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計30件)

関尾史郎、「魏晋「名刺簡」ノート」、『新潟史学』第60号、31～41頁、2008年、査読有。

関尾史郎、「南京出土の名刺簡について」、『資料学研究』第7号、横58～64頁、2010年、査読有。

関尾史郎、「在高台県域内の古墓群与古代郡県制」、『高台魏晋墓与河西歴史文化国際学術研究会論文集』、2010年、153～158頁、査読無。

町田隆吉、「4～5世紀吐魯番古墓壁画

・紙画再論」、『西北出土文献研究』第8号、2010年、21～40頁、査読無。
安部聡一郎、「長沙走馬楼三国呉簡にみえる「戸品出銭」簡について」、『資料学の方法を探る』9、2010年、19～27頁、査読無。

〔学会発表〕(計12件)

関尾史郎、「東アジア古代地域研究の視点」、韓国・ソウル大学校人文学研究院(招待講演)、2008年9月29日、ソウル大学校人文学。

関尾史郎、「東亜細亜に於ける書写材料と文字の西漸を巡って」、韓国・東北亜細亜研究財団シンポジウム「古代文字資料による東亜細亜の文化交流と疏通」(招待講演)、2009年6月10日、ソウル・国立故宮博物館。

関尾史郎、「魏晋簡牘研究への一視点」、国際ワークショップ「新出魏晋簡牘をめぐる諸問題」、2009年9月13日、立正大学大崎キャンパス。

伊藤敏雄、「長沙呉簡中的邸閣・倉吏」、『長沙呉簡国際学術研究会』、2011年3月15日、長沙簡牘博物館。

荻美津夫、「從魏晋五胡時代河西地区的磚画壁画中看到的音楽描写」、中国・甘粛省敦煌学会ほか「高台魏晋墓与河西歴史文化国際学術研究会」、2010年8月15日、高台賓館。

〔図書〕(計1件)

関尾史郎、高志書院・新大人文選書7、『もつひとつの敦煌 鎮墓瓶と画像磚の世界』、2011年、164頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ

<http://www.human.niigata-u.ac.jp/~ssekio>

(作成中)